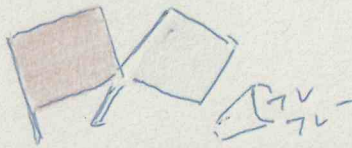




つばさ

多摩市立聖ヶ丘小学校
 特別支援教室 つばさ
 令和5年 11月 22日
 つばさだより 第8号



「行事」の始まりと終わり



先月、聖ヶ丘小学校では令和5年の「運動会」が、先日連光寺小学校では「学習発表会」が、無事に終わりました。どの学校、学年の児童も行事の中で、自分にできることを懸命にやっていたなあと感じました。また、応援や声援を送っていただいた保護者の皆様、ご参観、ご鑑賞ありがとうございました。各学年、個々人の盛り上がりからは「行事」の中での子供たちの興奮や充実、実りのある学びを感じることができました。「行事」はクラスや学年でそこに向かっていく学校生活の中における学びの場でもあり、同時に個々の非日常的な学びの場でもあります。「行事」前後の支援教室では個別やグループ指導を通して「行事」の振り返りを行い、個々がどのように「行事」に向き合っていたかを気持ちの言葉を使いながら整理して共有していきました。

運動会…「緊張はしたけど、徒競走での結果がよかったから、まあ、よかった。」「来年の運動会が心配…」「踊りがうまくできない所があったので残念!」「もっと褒めてほしかった」などいろいろな思いを抱えながら当日までの変則的な練習日程や通常と異なる雰囲気の中、自分なりの参加方法を模索してきた子もいました。しかし、当日参加することができたということなどを共有することができました。

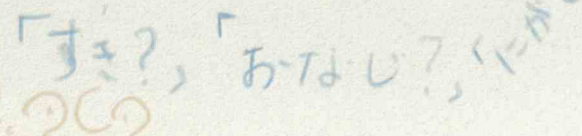
学習発表会…「ドキドキするけど、楽しみ!」「早く終わって欲しい」「始まりのブザー音が苦手」「逃げ出したい」「ほっとした」「お守りをもっていれば舞台上に立てそう!」学年練習の周囲に合わせる雰囲気が苦手な子もいました。また、子供たち同士でも「楽しみ!」「緊張する」というそれぞれの違う意見の共有場面もありました。

学校行事への取組に対しては、子供の数だけ個々の「思い」があります。ただ、当日、概ね全体的に行事がうまく流れている中では、我慢の範囲内で頑張っている子供の姿からはそのような「思い」を深読みすることが難しいとも思いました。そのような中、「自分はどう感じたか。」言うなればこのような気持ちだと互いに個々の気持ちを共有していくことで自分の「行事」への思いを前向きな形で整理できればと思います。「行事」は学びの大イベントであると同時に、子供によっては学校生活のルーティンが変化して思いもよらぬ「緊張」や「不安」を伴うものでもあることがやり取りからは伝わってきます。そのような中で一つの行事の始まりと終わりの成長に大人も子供も本当に大きなエネルギーを使ってよい学びを作ろうとしている。「行事」の始まりと終わりにこのような多様な「エネルギー(気持ち・思い)」があることを改めて意識しつつ、次の「行事」への準備に取り組んでいけるように子供たちを支援、応援していこうと感じた今回の振り返りでした。

好みのちがい



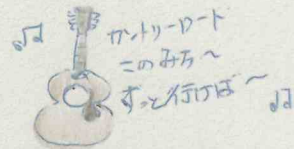
先日、グループ指導の中で「好み」のちがいについての授業を行いました。自分の感覚や気持ちについて話をする場面がよくありますが、その「感覚」が人とはちがうことは分かっていそうで分からないこともまだまだあります。今回は「食べ物」に対しての好みのちがいをテーマとして意見を出し合いました。まず、食べ物イラストカードをみんなで順番に見ていきます。「好き」「ふつう」「あまり好まない」の三段階で自分の「好み」を表出していきました。「からあげ」や「とんかつ」「ラーメン」「日本そば」「餃子」…中華、和食、洋食と続きますが全員が「好き」となるメニューがなかなか出てこないことに子供たちは驚いていました。また、「え~なんで?ふつう好きでしょ!?!」「みんな食べているはず!」等の発言もありました。イラストカードなので個々が抱えている食事の厳密な「好き」とはならないものもありますが、「好み」というものが人によって意外にちがうということが分かる場面となりました。グループの中で「好き」の「同意」メニューで印象的だったのは「お寿司」と「ラーメン」「餃子」の中華系が多いという点でした。「誰が何を好きか。好みのちがいを知っていることでこのメンバーで食事をするときの参考になるね!」というまとめになったグループ指導場面でした。



芸術の秋・映画「耳をすませば」から聞こえてくるもの

～自分探しの季節～

1995年にアニメが公開されてから28年になります。多摩市を舞台にしたジブリアニメとして多くの人に親しまれている作品ですね。高学年を中心に「耳をすませば」での主人公の成長を教材に話を読み聞かせを通して共有することがあります。成長していく自分を知る。自分が「背伸び」をしようとする感覚ってどのようなものだろう。そのようなことを一緒に考える材料としての作品を読み解いてみました。



「耳をすませば」読み解く「ストーリー」

主人公は中学3年生の月島雫という読書好きの女の子。日々図書館や図書室で本を借りる毎日。ある日、自分が借りる本の図書カード(時代を感じますね。)に常に同じ名前があることを見付けます。「天沢聖司。どんな人なんだろう。」雫の想いが膨らんでいきます。

友達との学校生活。部活。片思い。告白。終わりなき日常を背景に物語は進みます。そして天沢聖司が自分が偶然見付けたアンティーク店の店主の孫であること。将来バイオリンのマイスターになる夢をもっていることを知ります。最初は反目し合う二人ですが、徐々に互いの存在を認め合う関係へと発展。しかし、まだまだ未熟な主人公、雫のアイデンティティーはこの「成長」に大きく揺さぶられます。リスペクトする相手(聖司君)はもう夢が決まっていてイタリアに留学するとまで言っている。片や自分は聖司君と同じ高校に行けたらいいくらいの気持ち(目標?)しかもっていない。この決定的な「差」を主人公が感じることから物語は自分自身を見つめ成長する段階へと発展していきます。

「あいつは自分を試すって言った。だから私も自分を試してみる!」親友に自分の気持ちを打ち明け、自分の物語(小説)を書くことにチャレンジし始める雫。受験も迫る中学3年の二学期。親の反対も押し切り、雫はひたすらに物語を書き進めていきます。この物語で秀逸なのは、こうした突っ走る主人公を見守る大人の存在の描かれ方でもあります。「雫がそうしたいならやっごらん。でもね、自分で決めたことは、どんな結果になっても誰のせいにもできないからね。」雫の父も家族会議で厳しく、優しく父としての決意を伝えます。

聖司が帰国するまでの3週間。雫は自分を追い込んで物語を完成させます。そしてアンティーク店の店主で雫の理解者でもある聖司のおじいさんに完成した物語を届けます。「ありがとう。とてもよかった。」好意的な評価を受けた雫でしたが、自分でもこの小説がどのレベルの出来かがわかっていました。ただ、どんどん自分の先に行ってしまう聖司に追いつきたい一心で「背伸び」をした雫はおじいさんの前で泣き崩れてしまいます。そんな雫に「あなたは自分の原石を磨いてください」とおじいさんは語り掛けます。そしてこの経験から自分の今の精一杯の力に気が付いたとき、自分に何が必要なのかが見えてくるのでした。

物語後半、帰国した聖司と高台から朝日の上る多摩川を見つめながら、雫は「私、背伸びしてよかった。自分のこと、前より少しわかったから。私もっと勉強する。だから高校へもいこうって決めたの。」と、自分の心情を吐露します。そんな雫に聖司は将来結婚しようとプロポーズするのでした。

自分は何者なのか。何ができて、何ができないのか。この先どうなっていくのか。まだまだわからないことはこの先も出てくる。ただ、意識していなかった不安が自分事として目の前に現れたとき、人は葛藤しながら成長の一步を踏み出す。「耳をすませば」から聞こえてくるのはそんな未来に踏み出す未熟ながらも力強い一步への足音のように感じました。

